

パーソンズ社会学とトッド人類学の接続についての試論その2

—構造主義人類学を基準として—

神戸大学大学 小川晃生

1 目標ないし目的

報告者の研究の主目標は、社会システム理論の枠組みのなかでルーマン社会学以後を見据えた理論モデルを構築することである。この目標の中で今田高俊らの社会システム学などと異なる方向性を見出すために、報告者はパーソンズ社会学とエマニュエル・トッドの人類学の接続を当面の課題としている。この課題のなかでの具体的な研究目標は「パーソンズ社会学におけるパターン変数」と「トッド人類学の人類学的基底」を所与の数理モデルの作動という点で接続し、比較社会学・比較文明学で有用な、価値システムの作動についての研究を行うことだ。報告者はすでに「パターン変数」と「所与の数理モデルの作動」の接続についての研究方針を発表している（小川晃生、二〇一六）。またパーソンズ＝トッド接続のための予備的検討として、「サイバネティクス」概念を基準とした両者の比較のための研究をすでに発表している（小川、二〇一七）。本報告ではそれに続いて、「構造主義人類学」を基準とした両者の比較のための研究を報告するつもりだ。さまざまな点で異なる基盤の上に展開しているかのように思えるパーソンズとトッドの接続のためには、多様な角度からの関係付けが必要なのだ。なお、報告本編ではパーソンズとトッドを初期・後期にわけて検討する予定。

2 先行研究

パーソンズ社会学を「構造主義」と関係させて検討した先行研究は一定数ある。例えば油井清光（二〇〇四）は、パーソンズ社会学と構造主義の類似点・相違点を検討し、そのうえでパーソンズと「構造主義以後」との接続を示唆している。また松本和良（一九九七）も、パーソンズ社会学と構造主義（人類学）との関係性を検討している。トッド人類学と構造主義人類学との関係性については、トッド自身による検討（Todd 2011＝二〇一六）がある。その他の先行研究は現在調査中だ。

3 研究結果

予想される研究結果について記述しておく（結果を導出するのに使用した先行研究は割愛）。パーソンズ社会学は構造主義的側面（文化システムの螺旋状上昇等）を有するがそれと決して同一ではなく、ゆえにポスト構造主義的諸研究と接続可能。他方、トッド人類学はポスト構造主義的でありつつ構造主義人類学の遺産を拒絶しているわけではなくこの点で柔軟（文化的テイクオフ概念など）であり、構造主義的諸研究と接続可能。ゆえに「構造主義人類学」を基準としてみても、パーソンズ＝トッド接続は学術的に可能。

文献

今田高俊、鈴木正仁、黒石晋編,2011,『社会システム学をめざして』ミネルヴァ書房

松本和良,1997,『パーソンズの社会理論』恒星社厚生閣

小川晃生,2016,「パーソンズ社会学を基盤としたシミュレーション研究についての一考察—パターン変数の数理モデルによる表現をめざして—」『第89回日本社会学会大会報告要旨集』

———,2017,「パーソンズ社会学・トッド人類学の収斂についての試論—「サイバネティクス」概念を中心にすえて—」『第68回関西社会学会大会報告要旨集 2017』二頁

Todd, Emmanuel, 2011, *L'origine des Systèmes Familiaux Tome1:L'Eurasie*, Éditions Gallimard
(＝二〇一六、石崎晴己監訳『家族システムの起源 I ユーラシア』藤原書店)

油井清光,2004,「構造主義「以後」とパーソンズ」富永健一・徳安彰編『パーソンズ・ルネサンスへの招待—タルコット・パーソンズ生誕百年を記念して』二二五—二三七頁